

青野講演資料③ 2017.3.11

「全体的給付という形態」と

「全体的社会事象」について

「私たちの経済組織や法体系に先立って存在してきたあらゆる経済組織・法体系においては、財や富や生産物が、個人と個人とが交わす取引の中でただ単純に交換されるなどということは、ほとんど一度として認めることができない。」

「こうした交換は多量にのぼるが、地縁集団も家族集団も、道具その他を交換で得ずとも、別の機会に自前で賄うことができる。したがって、これらの贈り物は、もっと発達した社会における交易や交換と同じ目的に資するわけでない。目的はまずもって倫理的なものである。それが目指しているのは、当事者である二人の人物の間に友好的な感情を生み出すことになるのだ。…誰一人として、贈られたプレゼントを拒むことはできない。」

「第一に、お互いに義務を負い、交換を行い、契約を交わすのは、個人ではなく集団である。…第二に、これらの集団が交換するのは財や富だけではない。動産や不動産、経済的に有用性のあるものだけではないのである。交換されるのはなによりも、礼儀作法にかなった振る舞いであり、饗宴であり、儀礼であり、軍務であり、女性であり、子供であり、踊りであり、祝祭であり、祭市である。もちろん祭市では物が取引されるし、富が循環するのだけれども、それは契約のさまざまな契機や要素の一つに過ぎないのであって、契約それ自体はそれよりもはるかに一般的であり、はるかに恒常的なのだ。そして最後に、これらの給付と反対給付は、贈り物やプレゼントという、どちらかと言えば自発的なかたちで行われるのだが、それにもかかわらずそれは、実際のところまったく義務によってなされている。この義務を果たし損なえば、私的な戦争もしくは公式の戦争となったほどである。私は以上のすべてを、全体的給付の体系と呼ぶことを提案した。」

ここでの義務とは、規範に基づいた法的なものと理解しなくてはならない。このような義務的行為

によって、部族間の和解・相互理解が成立するとされてきた慣習である。だから、「義務」を現代的な意味で理解してはならないようだ。倫理的な目的のために、仲良くなるための義務＝自発的と理解しなくてはならない。これは、この体系の持つ拘束力を表している言葉である。別の言い方をすれば、モノのやりとりは、それを行っている人と集団の全存在のやりとりであり、生きることの意味の根幹に触れているものであろう。

「物質的生と精神的生、そして交換が、そこにおいては我欲を超えたものとして、かつ義務として、機能している。それに加えて、この義務というのが神話的で想像的な仕方では表現されている。」

しかし、それは「これらの給付がいわば自発的であり、見た目には自由で見返りを求めない給付としてなされているにかかわらず、それがじつは強制力にもとづき、利害関心にもとづいてなされているということである。」と、みなすこともできる経済形態でもある。

「私が論述してきたさまざまな経済行為の、そのすべてを鼓吹しているのは、ここでもまた一つの複合的観念である。…純粹で自発的で、純粹に見返りを求めない給付という観念ではなく、また、純粹な損得勘定に基づいた有用物の交換という観念でもないからである。…これらが混じり合った一種の混合物なのだ。」

この贈与関係は自由で非打算的でありながら、実は拘束的で打算そのものなのだ。そして、次のように述べている。

「私たちがこれまで使ってきたさまざまな語彙は、…それ自体としてはさほど正確なものではない。…自由に対する義務とか、寛大さ、気前の良さ、奢侈に対する儉約、利得、有用性とか、私たちはこうした諸概念をともかく対立し合うものとして捉えがちであるけれど、法と経済にかかわるこれらの概念をこのあたりで見直すのがよいのではないだろうか。」

そして、モースはまとめとして、次のように書いている。

全体的社会事象としてのこのシステムは、「社会の全体を活性化させ、あらゆる社会制度からな

る全体を活性化させるということだ。」

「これらの現象はすべて、法的現象であると同時に経済的現象であり、宗教的現象であり、さらにはまた審美的要素をもつ現象であり、社会形態にかかわる現象であり、等々である。」

法的には「組織されていない不定型な倫理意識」と関わり、宗教的には組織されていない「不定型な宗教的心性」が関与し、経済的現象としては経済的観念(価値・功利性・利益・富等)がいたるところに見られるが、それは今日の私たちが理解するのとは異なっている。また、審美的にはすべての現象は審美的感情を沸き立たせるものである。それは、「単に倫理とか利益とかに関わっている感情を呼び起こすだけではない」。社会形態としてはそこに人々が寄り集まるということを大前提となされている。人が集まるには、道や海や湖が必要であり、そこを無事に通るには、「部族内の連盟関係が必要であり、部族間の、さらに民族間の連盟が必要である。」すなわち、通商・取引・交際や通婚や縁組等が必要となる。そして、このシステムは、個々の要素の寄り集まりでなくして、全体として機能しているのであって「硬直した社会ではないのだし、静態にとどまっているとか、さらに生を失った残骸とかではない」としている。

そして、さらに述べている。

「この全体的給付の体系は、私たちが現に確認しうる限りで、そしてまた私たちが想像しうる限りで、最も古い経済・法体系をなしている。これが基礎となって、その下地の上に交換＝贈与の倫理が浮き彫りになってきたのである。そしてこの体系こそ、その規模に違いがあるとはいえ、私たちの諸社会がこちらの方向に進んで欲しいと私が思えるような経済・法体系と、まったくもって同じタイプの体系なのである。」

☆モースの熱い思い入れが語られているが、同じとは言っていない。

6 私の意見

モースの贈与論では、贈り物を循環させるという贈与のシステムは、その社会にかかわる個人と諸集団が対立的関係になることなく、殺し合うこと

なく向かい合うという社会関係であるとされている。これが、彼の生きていた 20 世紀の初めの社会には、近代に急速に広がった資本主義経済には欠落していると指摘してその有効性を説いている。

しかし、……。私としては、モースほど評価できないのだ。

互酬交換関係が主導的役割を果たしている経済活動では、自由意志で贈与するのではなく、支配・被支配の関係を作り出さない交換関係として、義務として贈与しなければならないことになる。いやでも受け取らなくてはならず、さらに必ず返礼としての贈与をしなくてはならないものとして機能している。そして、これにより同盟関係や協同関係、そして法的とも言い得る社会的関係性をもつことになる。この贈与関係を通して、対立・衝突を平和状態へと導くものである。つまり、このシステムは、平和、そして平等を重視したものであるが……。

私としては、……。実はこのような社会はそんなに平等ではない。首長とその配下の者たちと一般の人たちという区分はあるし、首長たちは世襲であることが多い。まあ、今日的な国家権力が成立していない、よりゆるやかな関係性の社会である、と言えよう。

ここまでのまとめから分かるように、このような贈与＝交換では、これに関わる人たちの生きていく上での全存在が活性化され熱く関係している。このように、個々人の意識がこの社会システムにきわめて強く拘束されている人間をモースは「全体的存在者」と言い、贈与関係にある社会の中で、人が安定的に位置づけられていることを示している。

*しかし、今の私たちだって、全的な存在者と言えよう。社会的規定性から免れている人などどこにもいないのだから。ただし、今の私たちは、より複合的であり社会的規制の程度に大きなばらつきがある。

このことは、このような社会で誕生する者は、生まれる以前からかなりの部分があらかじめ決定されていることになる。つまり、個々人の特性・個性、個々人の努力より、与えられている地位・立場の

役を演じることが最大限大切な事とされている。そして、これらをしかたなく演じるのではなく、きわめて能動的に社会参加をしている。社会の拘束性が自主性のごとく様子を示し、そのことによってこの社会秩序が再確認・再強化されているという関係性である。

モースは、このような熱い関係性と現代社会の疎遠性を対比的に観ている。そして、現代の貨幣による商品交換関係の肥大化は人間が生きていく上での脅威となっているから、人間の営みを本来のあるべき姿に、社会の中に取り戻そうと願った。しかし、…。

典型的互酬交換(クラ)は、世帯と世帯の間で、そして共同体と共同体の間で存在して機能するものであって、この関係性は、同等な関係性として行われる。如何なる人や部族が上位の地位に立つことを認めないものである。このシステムは、富や権力の集中を抑制するものであり、もっと言えば国家権力の成立を許さないものであるが、このような交換関係を通して、人的交流・交換も行われていた。それが、祝い事や儀式、祭り等を通して次々と循環していた。この贈与と返礼が義務としてだけではなくして、「祝祭的」な関係、名誉や威信や呪術的要素をもつものとして行われてきた。この交換関係がこのような心理的要素を持っているものとして当人たちの間で意識されていることが、贈与や返礼を促す動機であったと、モースは述べている。

だから、この交換形態を、現代的な意味での物・人・事の交換として捉えてはならない。送られた物に対してお返しをするという絶対的「義務を果たさないと、「マナ*」や名誉や権威を失う羽目になる。権威や「マナ」は、それ自体が富のお守りであり、富の源泉であるので、これが失われると、富を生み守るものも失われてしまう」

*「マナ」とは、超自然的、呪的な力を意味するメラネシア起源の言葉である。

こう理解すると、このような贈与関係(互酬交換関係)の現代的意義を理解しても、このような社会関係では、個々人の自由な創造的關係が委縮し

てしまい、とんでもない不自由な社会となりかねない。今の私たちから観て、とても受け入れがたいように思える。特に、「個人的自由」、そして「匿名の自由」は大きく制限されるであろうことが予想される。贈られた者は必死になってその返済をする。つまり、束縛が強く表れて来る関係性である。このような関係性が主導している社会では、自己確立に向けて苦闘する近代的個人の成立する余地はない。

この経済活動は、自由より平等を!そして、支配・被支配関係を拒否して、協同の硬い絆を作り出すのが…。このような互酬交換関係の単純賛美は、大きな問題である。特に、この贈与関係が呪術的・感情的な要素を含んだ義務として意識されているは、…。未来社会にこの交換関係が主導となることに賛意は難しいし、そうはならないであろうことが予想される。

さて、このようなアルカイックな社会は、私たちとは全く異なっていると言えるが、そんなに遠くはない。このシステムは私たちのすぐ近くに、日々の生活の中に潜んでいるが、実は、私たちとはほんの少し、そして大きくズレているパラレルな世界である。パラレルワールドとは、私たちの世界と昔のある時期までは共通していたのが、その後ズレしましもう交わることのない別の世界のことである。

実は、このようなズレている世界、社会関係、社会意識は私たちの近くにもある。例えば、田舎の社会と都会生活者の間にあるズレである。同じ空間、同じ時間を過ごしていても、贈与＝交換関係に対する量的・質的な差異がある。田舎に住んでいる私と都市で生育した人たちとは、モノが贈与されたときに感じる感じが違っているようだ。私などは、何を返礼しようかとすぐ考えてしまうのだが、都市生活者たちはそうではないようだ。私の姉は言う。「都会の人は、何かをあげても、お礼の言葉もない。お礼の電話もない。何にも返してこない。」